

学位（博士）論文要旨

看護学専攻	学籍番号 0933001
看護学教育研究領域 応用看護学	氏名 蓮池 光人
論文題目	境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための看護に関する研究
Key words : 境界性パーソナリティ障害 精神看護 社会生活 支援枠組み	
<p>本研究の目的は、境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための支援枠組みを開発することである。第一段階の研究目的は、支援枠組み案を作成することである。研究対象は、研究者が担当看護師として関わった境界性パーソナリティ障害患者3事例への看護過程である。研究方法は、入院してから退院後継続して関わる中で、再入院に至ることなく社会生活を送ることができた1事例への看護過程を分析し、支援枠組み試案を抽出する。試案を意識的に適用しながら2事例へ看護を実践し、看護過程を分析し、患者の変化の構造と患者の状態に応じた看護の指針を抽出し、支援枠組み案を作成する。第二段階の研究目的は、支援枠組み案を検証し、支援枠組みを完成させることである。研究対象は、支援枠組み案を意識的に適用しながら関わった看護チームの看護過程である。研究方法は、支援枠組み案を適用しながらケースカンファレンスを行い、対象の健康の段階に合わせた看護計画を立案・実践し、チーム看護師と共に実際の看護場面を振り返り看護の評価を行い、看護計画を修正しながら退院後の支援まで実践する。その一連の看護過程における対象の変化の特徴および看護師の認識と表現の特徴を取り出す。さらに、チーム看護師への境界性パーソナリティ障害患者の看護についてのインタビューを行い、これらを通して支援枠組み案の有効性について検討した。その結果、以下の結論を得ることができた。</p>	
<p>1. 境界性パーソナリティ障害患者の変化の構造</p> <p>「生活過程でつくられた自己の存在の意味への揺らぎや思い通りにいかない現実への感情の揺らぎの表出を積み重ねる。その過程の中で、他者からありのままの自分を認められたことによる快の感情が積み重なることで今の状態を受け入れる。そして、生活過程でつくられた自己の存在の意味への揺らぎや思い通りにいかない現実への感情の揺らぎの表出を積み重ねる。再開し始めた生活の中で生じた様々なストレスに対して、感情が揺れたり感情のコントロールができたりを積み重ねる。その過程の中で、その状態を振り返り、他者への気遣いの感情が生まれ、生活への目標像を描く。さらに、社会生活での自己の限界による揺らぎを振り返りながら健康的な行動へと変化させることを積み重ねる。その過程の中で、社会生活における目標が明確化し、自ら安定する環境を整え、生活を再開する。」</p>	
<p>2. 境界性パーソナリティ障害患者の状態に応じた看護の方向性と看護指針</p> <p><認識のゆれを感じている時期の看護の方向性【受容】の看護指針>として4つ、<認識のゆれとコントロールの経験を積み重ねている時期の看護の方向性【共有】の看護指針>として6つ、<認識のゆれの客観視を支える時期の看護の方向性【支援】の看護指針>として4つ、<全ての時期の看護の方向性を貫く看護指針>として1つを抽出した。</p> <p>この支援枠組みは、個々人の看護の自己評価能力を高めていくこと、及びチームが一丸となって、境界性パーソナリティ障害患者への看護に活用可能な枠組みであることが示唆された。</p>	

指導教員氏名（自署）： 山岸 仁美 1,200字以内 A4

平成 27 年 2 月 9 日

宮崎県立看護大学大学院
研究科長 山岸 仁美 様

学位論文 (博士) 審査委員

主査 氏名 (自署) 山岸 仁美

副査 氏名 (自署) 赤星 誠

副査 氏名 (自署) 浅野 昌亮

副査 氏名 (自署) 伊藤 收

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文 (博士) の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名	蓮池 光人	学籍番号	0933001
看護学専攻	応用看護学教育研究領域	指導教授氏名	山岸 仁美
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験
論文 題目	境界性パーソナリティ障害患者が 社会生活に適応していくための看護に関する研究		
審 査 要 旨	<p>本研究は、境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための支援枠組みの開発に取り組んだものである。</p> <p>予備審査では、理論的前提をより吟味した上で分析の精度をあげ、汎用性のある支援枠組みとして完成することを求められた。</p> <p>本審査では、境界性パーソナリティ障害患者の状態の変化の構造を抽出し、対象の状態に応じた看護の方向性と看護指針を見出し、支援枠組みとして示し得たことが高く評価された。その開発過程は、第一段階として、継続的な関わりにより社会生活を送ることができた研究者自身の看護実践の分析をもとに支援枠組み案を作成し、第二段階として、看護チームに提示し、看護チームで取り組んだ看護実践の分析を重ね、仮説検証を経て、社会生活に適応していくための支援枠組みとして完成された点において、汎用性の高い内容であることが認められた。さらに、本研究の意義について論述を深め、論文としての完成度を高めるよう助言された。</p> <p>以上より、本論文は博士論文として価値あるものとして認める。</p>		